

二〇二五年度置賜地区高校生

「地域と私たちの未来を考える」第八回小論文コンテスト

優秀小論文集

テーマ

「人口減少社会の中でも持続可能な地域とするため、
地域の未来と私の生き方を考える」

はじめに

近年日本の人口が減少する中、私たちの住む置賜地域も確実に人口が減少しています。このまま推移すれば、地域を支える人材や働き手が不足するだけでなく、地域の安全・安心や伝統・文化の維持存続が益々懸念されます。そして、このような人口減少の要因の一つに、高校生の進学・就職で県外に出て、戻ってくる人が少ない「若年層流出」があげられています。こうした状況下において二年後に進学・就職を迎える高校二年生が、地域に育つ当事者として、この地域の未来を見つめ、自分の将来の生き方を考えることは、どのような進路を選ぶにしても非常に大事なことです。以上のような趣旨から、「第八回置賜地区高校生『地域と私たちの未来を考える』小論文コンテスト」を、高校二年生を対象に実施いたしました。テーマは「人口減少社会の中でも持続可能な地域とするため、地域の未来と私の生き方を考える」です。九校から総数二百十六点の応募があり、大変喜んでおります。応募された生徒の皆さんとご指導いただいた先生方に心から御礼申し上げます。

小論文を読みますと、資料編を活用しあるいは探究学習や自分の体験、知見を基にして、この地域の未来のあり方を様々な視点から提案し、また自分の生き方を模索しており、趣旨に沿った小論文をまとめられました。応募者にとつては、この小論文に取り組んだ経験が将来必ずどこかで役立つものと確信しています。この小冊子は、一つの小論文を七名の委員により審査を行った結果、優れた小論文とされたもののうち、最優秀賞一点、優秀賞四点、入選五点を掲載しています。高校生や地域の方々に広くお読みいただき、地域の未来を共に考えていきたいと思えます。

令和七年十月十七日

第八回高校生小論文コンテスト実行委員会

QOLが導く地域の未来

米沢中央高等学校 二年

佐藤 遥佳

日本全体で少子高齢化が進む中、都会への人口集中は地方の人口減少を加速させている。私が住む山形県置賜地区でも、二〇五〇年には人口が三十五パーセント減少するとされ、地域の存続が危ぶまれる状況である。

山形県では、進学や就職を機に県外へ出る若者の流出が大きな要因となっている。私自身も、学びたい学問を求めて県外の大学への進学を希望している。私は将来、法学部に進学し、法律の知識を活かして人の役に立ちたいという思いがある。山形県内には自分の目標にあった学びの場が少なく、専門性を高めるには県外で学ぶ必要があると考えている。

だからこそ重要なのは「一度地元を離れても、また戻ってきたい」と思えるような地域づくりだと思う。私は、QOL（生活の質）の高さを活かして、Ｉターン、Ｕターン人口を増やすことが、持続可能な地域社会につながると考える。

東京では生活費が高く、家賃や交通費などの経済的負担に加え、人口密度や交通混雑によるストレスも大きい。働きながら子育てする環境としては、必ずしも理想的とは言えない。一方、山形のような地方では、自然に囲まれた落ち着いた環境や、新鮮な食材、広くゆとりのある住まいが得られ、QOLの高い暮らしが実現できる。

実現に向け私が考える支援策は二つある。一つ目は、米沢の地域特性を活かした子育て環境の整備である。四季の変化、美味しい食文化、歴史や伝統が息づく米沢ならではの環境を活かし、子どもたちが自然や地域社会と関わりながら育つ仕組みを作ることが、都市にはない価値を提供できると感じている。私自身、町内の芋煮会やお祭りで神輿を担いだ記憶があり、地域とのつながりを強く感じた経験がある。こうした体験

こそが、QOLの高さにつながっていると思う。

二つ目は、転職支援の強化である。地方では終身雇用の意識が根強く、新たに来た人にとって働き始めるまでのハードルが高いのが現実である。行政と企業が協力し、移住者のスキルに応じた職場の紹介と、就職後の生活や人間関係への寄り添いが重要だと思う。安心して暮らし、働ける環境こそがQOLを支える土台である。

私は将来、法律を学んだ知識を活かして、地域に関する制度づくりや暮らしやすい社会の仕組みに関わりたいと考えている。たとえば、移住者支援や子育て制度の整備など、法的な視点から地域をサポートする活動に携わりたい。そのためにも、一度外に出て視野を広げ、学んだことを地元に戻元していきたい。

たとえ進学で県外に出たとしても、「米沢の豊かな環境で育ててもらったから今の自分がある」という気持ち忘れずに、ふるさとのQOLをさらに高める担い手になりたいと心から思っている。

優秀賞

学園都市推進協議会会長賞

未来へつなげる一歩

山形県立米沢鶴城高等学校 二年

佐藤心愛

私の住む飯豊町は、「第一回美しい日本のむら景観コンテスト」で最高賞の栄誉にも輝く、自然豊かで美しい町だ。季節ごとに趣を変える山々。古から続く屋敷林。月と共に夜空を星々。秋になると金色に輝く田園。まさに飯が豊かになるこの町が私は大好きだ。

だが、飯豊町は常に消滅の危機と隣り合わせだ。平成二十五年に飯豊分校が閉校、現在置賜地域で唯一高校がない。そのため、若者の往来が減少し、以前のよいうな活気が見られなくなった。さらに、少子化が激しく、置賜地域初の、義務教育学校の開校が決定済みだ。この状況下で、大切な故郷を未来へ存続させるため

に、私たちには何ができるのだろうか。そうした問題意識から、夏休み、私は町主催の「ブルーペイントプロジェクト」ボランティアに参加し、地域の方々と交流することにした。身体障害者用駐車スペースを作るため、学生や健康福祉センターの方など多くの人が炎天下で協力し、汗を流した。私は一人で応募したため、誰とも話せずにいた。だが、私を見ていた職員の方々が初対面にもかかわらず、気さくに話しかけてくださり、飯豊町の人の温かさを改めて実感した。話の中で、私は職員の方に自身が抱いている疑問を投げかけ、町の良さを尋ねた。その方は、飯豊町の自然と、子育て環境が良いと答えてくださった。

飯豊町は、子どもの医療費無償化施行が早く、子育て支援に特に力を入れている。私は、八歳の時に喘息が理由で飯豊町に越してきた。転居後三年が経つ頃には、運動会にも出られず、二週間も連続で欠席しなければならぬ程ひどかった咳が治った。この土地の空気が澄んでいてきれいだったため、症状が劇的に回復したのだ。私だけでなく飯豊町では、お年寄りの方も毎日元気に農作業に励むなど、子どもから大人まで健

康な人が多いと感じる。

このような事例を世に周知することが、人口増加への一歩になると私は考える。飯豊町は犯罪率も低く、令和五年には置賜地域で一番治安のよい町に選ばれている。若い女性の県外流出が大きな課題となっているが、安心安全で健やかな子育てができるということは、大きな強みになるのではないだろうか。

私には、将来大好きな故郷にトリマーとして店舗を持ちたいという夢がある。目標は、できればめぐみの里近くに冬でも利用できる雪のドッグランやカフェも併設することだ。若者や犬好きの人々を県内外から集めることで、賑わいを創出していきたい。この夢を叶え、町に貢献できるように、私は経営の勉強ができる商業高校に入学し、日商簿記検定を取り、日々マーケティングも学んでいる。トリマー資格習得のため、一旦は県外の専門校に進学するが、確かな技術を身に付け、学んだことを駆使し、必ず飯豊町で活躍したい。さらに、愛する故郷の良さを広く発信し、町を興す一歩につなげたいと願っている。

出ていくことが終わりにじゃない

米沢中央高等学校 二年

加藤和叶

「県外に出たら、もう戻って来ないよ。」

誰かが言ったわけではないがそんな空気を感ずる時がある。本来、大学進学のための夢のためだ。現在、山形県内には一つの国立大学、来春からを含めて、三つの公立大学が存在する。しかし、検査技師や獣医などの学部はなく、県外に行かなければ学べない学部もあるのが現状だ。私自身も、大学進学を機に県外に出ようと考えている一人である。だがそれは、地元の魅力がないからという理由ではない。私の場合は、大学でより広く学んだことをいざれ地元を持ち帰り、後に地域活性化に還元したいからだ。現在山形県では、若者の県外流出が続き、資料からも大学進学者の約七

割、就職者の約二割が県外を選択していることが読み取れる。しかし、ここで大事なのは県外へ出ることそのものを問題にするのではなく、出た先で得た経験を地元はどう活かすかということだ。地域の未来を考えると、私たち一人一人の「生き方の選択」によって始まるのではないかと考える。

私が地域に対して興味を持つようになったきっかけは、「南陽みらい議会」という取り組みに参加したことが大きい。そこで話し合われた内容の中で、私は南陽市の特色を知るだけではなく、「人口減少」という避け難い現実にも向き合った。資料からも分かる通り、南陽市を含む山形県は五年連続で待機児童ゼロを達成し、高い有給休暇取得率や働く母親の多さといった子育てしやすい環境が整っている。そこで、子育てに適している部分を前面に出し、「新しく親になる世代をターゲットとした地域づくり」を行っていく必要があると考える。子供が生まれたタイミングで多くの人々が生活の拠点を見直すことが多い。したがって、子供を育てるならこの地域が良いと思ってもらえるような

環境を整えることは、Uターンや移住のきっかけに繋がると考える。

私は将来、このような教育を届ける「教育者」になりたい。南陽みらい議会で自分が受け取ったような学びを将来は子供達に伝えられる側になりたい。そのためには、子供を育てる大人達にも目を向ける必要がある。私が地域づくりで注目しているのは「新しく親になる世代」をあえてターゲットにする視点だ。しかし、教育や地域づくりの課題は人口減少のほかにも、小中学校の統廃合や倍率の低下、教育者の不足といった問題が深刻である。私一人が教育者になったところで何かが大きく変わるわけではない。しかし、地元に戻ってきた若者が、小さな一歩を踏み出すことに大きな意味があると考える。私は、進学という「外への一歩」を選ぶけれども、それを地域と離れることとは考えていない。県外に出ることで初めて気づける地元の良いことや県外で得た経験を地域の教育や子育て環境に活かしていく。それが、私の考える「持続可能な地域の未来」と「自分の生き方」の結び付き方だ。

長井商工会議所会頭賞

地域の未来を考える

米沢中央高等学校 二年

佐藤春翔

私は自分の住む米沢市を持続可能な地域にしていけるために、豊かな自然を活かした農業体験を開催するのが良いと考えた。地域の魅力を伝えることができ、転入者やIUターン者を増やすことができるのではないだろうか。なぜかというところ、小野川の共同浴場で「大人の農業合宿」に参加する県外の方々と一緒にあったからだ。参加者の方とはとても活き活きとされていた。この合宿は高畠町の中川吉右衛門さんという方が主催している。自身も元々は鳶職で農業とは無縁だったそう。木村秋則さんという方の「奇跡のリンゴ」の番組に感銘を受け、江戸時代から十四代続く「中川吉右衛門」を襲名。現在は自然栽培による地域活性化に尽

力されている。その活動の一環として合宿を開催し参加者に学びの場を提供している。この合宿のように農業体験を通して、米沢の魅力、農業の魅力を伝えていくことができるのではないか。

現在、若者の県外転出が増加している。転出から転入分を差し引いた転出超過率は山形県が約二十五%、置賜地域が約四十%。置賜地域の割合が約十五%も上回っている。特に大学などへの進学者のうち六十六%が県外に進学している。私は、卒業後に職を探す大学生にPRする活動の一環として農業体験に参加してもらうのが良いと考える。就職先や居住先の選択の幅を広げることができるからだ。現在、山形県では三十二の大学とU・イターン就職促進協定を結び県内企業の人材確保を図っている。これらの大学と協力することで、地元企業への就職を増やせるのではないだろうか。また、農業体験を行うことで自然と触れ合う機会を作るだけでなく、就農者を増やすことにもつながると考える。米沢には館山りんごや米沢牛といった特産品がある。また、稲作も盛んだ。しかし、その担い手

は減少し高齢化も進んでいる。地元企業の人材確保だけでなく、農家の担い手の育成や耕作放棄地の削減といったところにも目を向ける必要がある。農家になるには主に三つの方法がある。一つ目は第三者農業経営継承という方法だ。家族以外の継承希望者に移譲者が経営を継承するものだ。二つ目は就農研修を受け認定新規就農者となる方法だ。三つ目は家業を引き継ぐ方法だ。農家になるためには自治体の支援が不可欠だ。例えば、北海道ではJA等の農業関連団体が、個別面談や農地の斡旋など様々な支援を行っている。さらに、認定新規就農者に対して青年等就農資金として無利子で最大三千七百万円の融資支援を行っている。こうした支援の充実化や地域の農家との連携で就農者を増やせるのではないか。

私は、これらの理由から農業体験を通して米沢を持続可能な地域にしていけるかと考える。また、私は将来県内の大学で農業を学び地元で就農したいと考えている。そして地元のために貢献していきたい。

米沢信用金庫理事長賞

フルーツ大国に未来を

山形県立南陽高等学校 二年

佐藤芽奈

山形県は、自然豊かな土地に恵まれた農業地帯であり、私の住む地域ではさくらんぼや洋梨、りんご、ブドウといった果物の栽培が盛んだ。毎年夏になると果樹園には観光客も訪れ、町全体が賑わっている。しかし、少子高齢化や人口減少の影響で農家の担い手が減りつつあり、私の家の近くに結構大きい果樹園があったのだが、もう撤去されており現在土壌工事が行われている。そういった現状を目の当たりにすると、このままでは地域の大切な宝が失われてしまうのではと不安に感じている。

このような人口減少社会でも、地域が持続可能であるためには、「農業を未来につなげる仕組み」と「人

と人のつながり」を大切にするのが大切だと考える。

まず、私たちの地域にとって果樹栽培は単なる産業ではなく、地域の誇りそのものだと考えている。だからこそ、若者に魅力を感じ、将来の選択肢の一つとして考えるような工夫が求められる。例えば、果物の収穫体験や加工体験などを通して、地元の農業に親しむ機会を増やしていくことができる。さらに、スマート農業の導入によってドローンやAIを使った効率的な果樹管理を行うことで、若い世代にとって「かっこいい農業」として発信することも可能だと思う。

また、農作物を使った商品開発や観光との連携も大切だと考える。例えば、さくらんぼジャムや洋梨のスイーツ、リングジュース、ブドウのゼリーなど、地元の果物を活かした商品は、都市部の人たちにも人気が出る可能性がある。私自身、これからはSNSや動画を通して、地元の果物や農家の魅力を全国に発信することが重要になってくると考えている。地域の魅力を外に伝えていくことによって、農家の価値を再確認し、地域に興味を持つてくれる人が増えるはずだ。

さらに、恒例の農家さんと若者が交流できる場を増やすことも、地域の未来につながる大切な取り組みだと思う。私の家では果樹園をしていて、父から果物の選別だったり、保存の工夫を教わり、教科書では学べない知識を得ることができた。こうした世代を超えたつながりが、地域への愛着や責任感を育てていくのだと感じた。これからも、家の手伝いや父から農業について知識などを教わっていきたい。

人口減少の波に流されるのではなく、地域の強みである農業を活かし新しい価値を生み出していくということ。それが持続可能な地域を作る鍵となる。私もこれからこの山形県の一員としての自覚を持ち、未来を支える行動を今から始めていきたい。



入 選

田舎はなにもない、ということはない

山形県立小国高等学校 二年

清水美来

「田舎はなんもない」これは、私が今、地域みらい留学で生活している小国町でよく耳にする言葉だ。確かに都会に比べてお店が少なく、交通の便も悪いかもしれない。しかし、私はこの町で暮らす中で、田舎には都会にはない魅力や豊かさがあることを知った。

私は「親元を離れて自分のやりたいことをしたい」

「自然のなかで生活してみたい」という思いから、神奈川県を離れて小国高校に入学した。来る前は、未知の世界に飛び込む不安もあったが、実際に生活してみると、人とのつながりや地域の温かさを強く感じた。

インターンシップで農業体験をした時のことだ。苗箱洗いや苗植えの手伝いといった作業は最初から新鮮

で面白かった。さらに地域の方々が植物の育て方や作業の意味を教えてくださいましたことで、その面白さは一層大きなものになった。作業中もたくさん話しかけて小国町のことを教えてくださいましたり、反対に私の地元の話に興味深そうに聞いてくださったりした。そのやりとりを通して、ただの作業仲間ではなく、「一緒に時間を共有する人」として受け入れてもらえていると感じた。そのおかげで作業は大変だったが、作物を育てる喜びだけでなく、人と人が支え合い、関わり合いながら生きる温かさを強く実感できた。そのとき、「ここにきてよかった」と心から思えた。

冬の除雪作業を見て、地域で助け合わなければ生活が成り立たない現実を知った。都会では道路や電車が整っていることを当然と思っていたが、小国町では人々の努力で日常が守られていると感じた。こうした体験から、私は「不便さの裏にある支えあいの価値」に気づいた。

一方で、小国町を含む置賜地域では、若者が進学や就職で県外へ出てしまう。人口減少や高齢化が進み、

担い手不足は地域全体の大きな課題だ。しかし、地域みらい留学のような制度を通じて外から来た若者が地域の良さを知れば、未来はもっと明るくなるはずだ。私は田舎を「選択肢が少ない場所」ではなく、「新しい価値を感じ生み出せる場所」として広めたい。そのため、地域という枠を超えて交流の場を作りたい。私が小国町で交流を通して新しい発見をしたように、置賜地区・山形県・日本は勿論、日本以外の同世代の人にもそうした体験をしてほしい。特に近隣の韓国は日本との距離も近く、文化交流もしやすい。具体的な形は今後考えていくが、まずお互いの文化を深く学びあい、私ができる「架け橋」となりたい。

小国町での経験が「新しい価値を生み出す」という私の生き方の軸を作っている。そして今の私は、「田舎はなんもない」と聞いても迷わずこう伝える。「ここには、私にとってかけがえのないものがある」と。

地域の未来と臨床工学技士としての私の生き方

山形県立南陽高等学校 二年

青木優奈

日本は今、急速な人口減少と高齢化の波に直面している。多くの地域では、若者の都市部への流出により、地域社会の活力が失われつつある。私の住む地域も、小学生の頃の通学路に空き家があったが、年々空き家が増えていくように感じる。他にも、地域の祭りなどの担い手の不足が課題になっていると実感する。こうした中で、地域の未来をどのように描き、私はどのように生きるべきなのかを考える必要がある。

持続可能な地域を実現するためには、まず「地域に住む価値」を再発見することが重要だと考える。地方には都会にはない自然の美しさや、顔の見える人間関係、地元で育まれた文化や行事などがえのない魅力がある。これらを活かし、観光や農業、地域産業な

どを活性化させることで、地域の経済を循環させることができるのではないかと思う。

地域の人々と協力しながら、若者が住みたいと思える環境づくりも必要だ。具体的にはテレワークを活用した仕事の機会の創出や、地域資源を活かした起業の支援、さらには移住者へのサポート体制の整備などが考えられる。こうした取り組みを行うことで、新たな人の流れを生み出し、地域に活力を取り戻すことができると思う。

私は将来、臨床工学技士として地域医療に貢献したいと考えている。地方の医療現場では医師や看護師の負担が非常に重く、医療機器を専門に扱える人材の確保が重要となっている。私は、ある程度の経験を積んだら地元に戻り、地域病院や透析クリニックで働き、地域の医療体制を支える一員になりたい。そして、高齢者や慢性疾患を抱える患者さんが安心して治療を受けられるよう、日々の業務を通じて貢献していきたい。

都市に出ることが「成功」とされがちな現代において、私はあえて地元に戻り、そこで第二の人生を歩み

たい。医療を通して地域の人々と深く関わり合いながら、自分の技術と知識を地域の未来のために活かしていきたいと考えている。

持続可能な地域を実現するためには、行政の支援や経済の再構築だけでなく、そこに住む一人一人の意識と行動が不可欠である。私は医療という分野から地域に関わることで、住民の健康と命を守り、安心して暮らせるまちづくりに貢献していきたい。そして、次の世代にも「この町で生きていこう」と思ってもらえるような地域の姿を、自らの手でつくっていきたい。人口減少は避けられない現実かもしれない。しかし、その中で私たちは、「どう生きるか」「どう支えるか」を選ぶことができる。臨床工学技士として、地域に貢献することこそが目指す生き方であり、地域の未来を支える一歩であることを信じている。

地域の未来を考える

山形県立高島高等学校 二年

鈴木 木結愛

最近「人口減少」や「高齢化」という言葉を様々な場面で目にするようになった。置賜地区でも高齢化が進むと共に地域の担い手不足が問題となっている。この問題に直面した今、高校生が積極的に地域活動に関わることが持続可能な地域づくりに繋がるのではないかと考えた。

私は昨年度「たかはたチャレンジプロジェクト」という高島町の教育事業の活動に参加した。そこでは、町で開催するイベントを高島中学校、高島高校の生徒で一から企画したり、自分達のアイデアでお金を稼ぐようなプロジェクトを行った。そのように中高生が町で活動をしていると、いつもより少し町の雰囲気良くなっているように感じた。そして、中高生が町との繋がりを深め、今まで気付かなかった町の魅力を感じ

たり、逆に町の課題を見つかったり、解決策を考えたりすることに繋がる。

実際にこの活動をしていて、町で活躍する方々から「若い人達からしか感じられないパワーがある」と言っていたことがあったり、「中高生がこんな活躍してるの、初めて見た。一緒に町盛り上げていくうな！」と温かい言葉をかけていただくこともあった。その時に初めて町の方々と肩を組めた気がした。

そのような経験を重ね、高校生でも人口減少の課題を少しでも解決に近づけることができるのではないかなと思う。例えば、町の魅力を最大限に詰め込んだイベントを開催したり、SNSで高校生が町の魅力を発信したりするなどしてこの地域に興味を持ってもらう。そんな活動は高校生の新しい発想やエネルギーを活かして、地域に活気を取り戻す新しいアイデアだと思う。このような活動を通して、私は将来、町役場で働きたいという夢を持つようになった。地域のことを真剣に考える仲間や大人と出会い、町をもっと元気にするための仕組みづくりに関わりたいと思った。外から見

ただけでは中々気付くことができない町の良さや課題を高校生のうちから肌で感じたからこそ、自分ならではの視点で地域づくりに貢献することができると思う。

地域の未来をつくっていくのは大人だけでなく、私たち高校生にもできることがある。高校生ならではの新しい発想やエネルギーが地域の活性化に欠かせない力だと思う。地域活動に積極的に参加し、未来の地域づくりを担っていきたい。



人口減少の中で私ができること

山形県立小国高等学校 二年

齋藤 未紗貴

母に言われた一言。「こんな何もない町、早く出たい。」私もそう思って県外に進学を希望している一人だ。

そんな私の考えが大きく変化する出来事があった。それは、一年生の時に行った探究活動だ。一年生では、「地域に浸る」という目的で小国町の様々な地域に出て活動する。探究活動の内容は小国町の様々な場所へ活動する「素敵な大人たち」に話を聞きに行くというものだ。その中で東京から小国町に訪れ、移住された方から「小国町の自然は東京の方と違って、作られた自然ではないから私はこの自然を守っていきたい。」とお聞きし、私は幼い時から小国町の自然の中で生きてきたためこのようなことを考えることがなかったことを知り、小国町の魅力に新しく気付いた。そして、

二、三年生の時に「マイプロジェクト」(通称マイプロ)という一人ひとりが自分でテーマを設定して活動する学習があるため、実際に自分のマイプロを進めることになる二年生のときに、小国町の魅力を知ってもらおう活動にしようと思った。

小国町を知ってもらうには、PR不足であると考えた。その理由として、小国町に来る人は移住者や帰省などがほとんどであり、移住者の人数も人口減少問題解決には程遠いと感じたからだ。この問題を解決するには、発信方法を変えることが根本にあると考える。ホームページは確かに見てくれる人は少なからずいると思うが、それは検索しなければまず見ることはない。小国町は新潟県との県境の町であり、国道を通る人は多い。だが通るだけで魅力が伝わりとは思えない。そこから「小国町の自然や文化の魅力をどのように伝え、結果的に人口減少問題の解決に貢献できるのか」を考え、自分の好きなことで貢献することを取り入れようと考えた。小学生の頃から絵を描くのが好きだった私は、高校生になってイベントのポスターやロゴデザイン

ンに興味を持った。そこで私が見出したマイプロは、「小国町には何もない。だが来ることので得られるなにかがあることをPRすることができると観光ポスターを作り、全国の駅に貼ることを目標とする」だった。これこそ人口減少が進んでいるこの町に、田舎に少しでも興味がある人などを惹きつけることができると考えた。その為、今年の一年間は私のクラスにもいる地域みらい留学生に話を聞いたりすることでポスター制作に向けて準備をし、来年は実際にポスター制作を進めていきたい。

小国町には多くの魅力がある。緑に輝く川、春の季節になると一面に咲く花々、風に吹かれ生い茂る木々など、四季を通じて美しい自然を見ることができ。このような小国町にある美しい自然の写真を撮り、今後のポスター制作に取り入れて小国町の魅力を伝えていきたい。残りの高校生活では、町民も知らない小国町の魅力を私の発想力で伝えていきたい。

地域活性化に向けた改革

米沢中央高等学校 二年

遠藤 かのこ

現在、置賜地区の人口が著しく減少している。その主な原因として若者の県外流出が挙げられる。特に、二十二歳と二十三歳の県外流出者が合わせて二千六百九十七人と際立って多い。つまり大学を卒業した後には県外へ就職のために出ていく若者が多いということを示している。そのため私は若者の地元就職を増やすことが地域の活性化につながると考えた。

県外に就職する理由として、都市部の企業の方が情報が多いということが挙げられる。情報発信や就職・転職に関する業者の多くは都市部に集中しており、地方の情報発信力や広報力は自然と弱くなってしまいうめである。

そこで私が提案するのは、地元の企業について理解を深める場を多く設けることだ。

まず、本校には高校一年生に対して行われている職業体験会（WAKUWAKUWORLD）がある。このような場で実際に職業を体験することで、知見が広がり、その職業に対する理解も深まる。さらに、こういった地元の企業との交流があるとなりがりが生まれる。すると見知らぬ職場よりも親しみやすく、適応しやすくなる。

また、WAKUWAKUWORLDよりも企業への理解が深まるインターシップは、大学を目指す学生にはあまり機会がなく、大学進学後に県内企業のインターシップへの参加を促す必要がある。そのため資料六の事例一で多くの私立大学と協定を結んでいるように、国公立大学とも協定を結ぶとより一層の効果が期待できるのではないだろうか。

そして、このような機会を受動的に受け入れるだけでなく、私たち高校生もWAKUWAKUWORLDなどに意欲的に取り組み、積極的に地元のことについて知ろうと関心を持つことも大切だ。

次に、私は大学で工学を学ぶことを志している。工

学は現代社会の基盤を支える重要な学問であり、技術革新を通じて、地域社会に貢献できると考えている。例えば、IOTやAI技術を活用したスマート農業の導入がある。これによりデータに基づいた栽培管理ができるようになる。スマート農業ではデータを解析することで防除や施肥の適期を予測できるため、効率的かつ適切な管理ができ、品質や収量の向上につながる。

このような技術を得るために私は外部で経験を積み、知識を米沢に持ち帰り、地域の発展に貢献したいと考えている。大切なのは、地元に残ることと県外に出ることを二者択一で考えるのではなく、どちらを選んでも地域貢献の手段になると考えることである。

持続可能な地域づくりには、企業の魅力を広く伝える取り組みや、私たちがその魅力を理解する内部からの改革と、最先端技術の導入などの外部からの刺激の両方が必要不可欠である。

審査講評

第八回の小論文コンテストには、九校から二一六名の応募がありました。ここ数年は八十〜九十名の応募でしたから、大変喜ばしいことであり、応募された高校生とご指導頂いた先生に感謝申し上げます。全体的な印象としては、多くの小論文は若者らしく、情熱をもつて真摯に書かれていると感じました。

山形県の推計人口は令和七年五月一日現在で九九万九三七八人と初めて一〇〇万人を割り込み県内では大きなニュースになりました。置賜地方の人口も減少し、同年四月一日現在の推計人口は一八万九〇三三人とやはり減少しています。毎年着実に人口が減少していき、置賜地方の教育、文化、産業の発展に大きな影響を与えており、将来を担う高校二年生にとっても身近で深刻な問題となっています。そういう情勢の変化もあり今年寄せられた論文は、自分の将来の方向性を真剣に考える内容が多かったと思います。将来の進路に関し、高校卒業後すぐに地元に残って地元への貢献を目指す人達と、一旦県外に出て大学等で知識や技術身に着けてから地元に戻り貢献することを考えている人達がいましたが、どちらも地元を豊かにしたいという思いが溢れていました。その中で最優秀賞に選ばれた佐藤遥佳さんは後者に属しますが、得た専門知識を活かすと同時に地元に戻った場合のQOL（生活の質）の高さを目指す方法も追求しています。その他の論文でも単なるUターンやIターンが目標ではなく、地元置賜に貢献できる方法や施策を具体的に考えている人が多かったと感じました。この方向性は量から質への転換を図る意味でもとても重要な点で、人口は減少しても、それを上回る生活の豊かさを求めることの大切さを高校生の皆さん自身が真剣に感じ始めていることの現れかと思えます。

次回の小論文コンテストに期待したいことは、進学校の高校生からさらに多くの応募があることです。勉強が忙しくて手が回らないのが実情かもしれませんが、自分が将来戻るかもしれない地元置賜の未来を高校生の時代に真剣に考えてみるのも良い経験になるのではないかと思います。日頃指導されている先生のご支援、ご協力をよろしくお願いいたします。

第八回置賜地区高校生「地域と私たちの未来を考える」小論文コンテスト

応募要項

一. 趣 旨

近年日本の人口が減少する中、私たちの住む置賜地域も人口が減少し、将来も減少する推計が示されています。このまま推移すれば、地域を支える人材や働き手が不足するだけでなく、地域全体の衰退に結びつくものと懸念されています。人口減少の様々な要因の一つに、若年層（十五～二十四歳）が進学・就職で県外に出て、戻ってくる人が少ない「若年層流出」があげられています。このような現状を踏まえて、地域と私たちの未来をどのようににつくり上げていくべきなのでしょう。高校二年生の皆さんにとって、今まさに地域に育つ当事者として、この地域の未来を見つめ、自分の将来の生き方を考えることは、どのような進路を決めるにしても大事なことです。当コンテストは皆さんが地域と自分の未来を考える契機になることを願い、実施するものです。

人口減少社会の中でも持続可能な地域とするため、地域の未来と私の生き方を考える

二. テーマ 三. 対象者

四. 応募規程

置賜地区高等学校二年生

① 応募要項の資料編や独自の資料を参考にして、テーマについて考えをまとめてください。また、各自の題名を付けてください。

② 文字数は一二〇〇字以内（四〇〇字詰め原稿用紙三枚以内）、一〇〇〇字以上を目安とします。

③ 原稿用紙は縦書きに、一行目に題名、二行目に学校名・氏名、三行目から本文を書いてください。題名、学校名・氏名も字数に数え、不記載は減点にします。

④ 使用鉛筆はB又は2Bを用い、字は大きく鮮明に書いてください。

五. 審査の観点

- ⑤ AIによる生成物を著しく引用し、自己の小論文として応募することはできません。
- ① 観察力 現状を注意深く見て学習し気づきを得ているか。
- ② 提案力 独創性に富み前向きな提案であるか。
- ③ 主体性 自分が課題解決にどのように具体的に関わっていくか。
- ④ 論理性 客観的、合理的な論理展開ができていくか。
- ⑤ 表現力 字は大きく鮮明（読みにくいものは減点）に書き、誤字脱字がなく、言いたいことを十分に伝えている文章と題名であるか。

この五つの観点を踏まえた小論文を書いてください。この観点で評価します。また、自分の体験や学習を基にして作成されている程度が高い場合は加点します。

六. 応募先
七. 応募締切

各学校の担当者まで
各学校で指定する期日まで

各学校から米沢有為会米沢支部事務局への提出締切日 九月二日（火）「必着」

最優秀賞一点 優秀賞四点 入選五点

八. 表彰
九. 表彰式

十月二十五日（土）、米沢市内ホテルにて

公益社団法人米沢有為会会長 五雲寺卓

公益社団法人米沢有為会 学園都市推進協議会

十. 審査委員長
十一. 主催・共催
十二. 後援・協賛

置賜地区高等学校校長会 米沢商工会議所 長井商工会議所 米沢信用金庫
置賜総合開発協議会 NCV株式会社ニューメディア

（注）この応募要項・資料編や今までの優秀小論文並びに第八回小論文コンテストガイドンスを、下のQRコードからご覧になれます。



資 料 編

○はじめに、山形県及び置賜地域の人口の動きを、将来推計人口(資料1)、県外転入・転出状況(資料2)、山形県高校卒業者の県外への進学・就職状況(資料3)のデータから見てみましょう。(人数の単位は人)

資料1 山形県及び置賜地域市町別の将来推計人口

	2020年	2030年	2040年	2050年	人口変化率 2050/2020
山形県	1,068,027	945,122	827,776	710,838	66.6%
置賜地域	201,846	173,874	148,421	123,782	61.3%
米沢市	81,252	71,907	62,506	53,112	65.4%
長井市	26,543	23,140	20,005	16,881	63.6%
南陽市	30,420	26,419	22,851	19,390	63.7%
高畠町	22,463	19,257	16,549	13,826	61.6%
川西町	14,558	11,636	9,253	7,107	48.8%
小国町	7,107	5,591	4,345	3,298	46.4%
白鷹町	12,890	10,489	8,490	6,660	51.7%
飯豊町	6,613	5,435	4,422	3,508	53.0%

出典：国立社会保障・人口問題研究所

置賜地域では、2050年の人口が2020年と比較して39%減少すると推計されています。

資料2 置賜地域と山形県の県外転入・転出状況(令和5年10月～令和6年9月)

	県外転入 a	県外転出 b	転出超過 b-a
置賜地域	2,572	3,347	775
若年層	785	1,256	471
山形県	14,604	17,749	3,145
若年層	4,362	6,730	2,368

出典：令和6年山形県の人口と世帯数

令和5年10月～6年9月の置賜地域(山形県)の県外転入・転出状況は、775(3,145)人の転出超過です。また、置賜地域(山形県)の15～24歳の若年層の転出超過は471(2,368)人となっており、高校や大学等の卒業や就職を迎える若年層の転出超過が多く、社会動態における人口減少の大きな要因になっています。

資料3 置賜地域と山形県の高卒者の県外への進学・就職状況(令和6年5月1日現在)

	高校卒業者数	大学等進学者数 (うち県外/県外%)	専修学校等進学者数 (うち県外/県外%)	就職者数 (うち県外/県外%)
置賜地域	1,472	707 (507/72%)	342 (193/56%)	391 (91/23%)
山形県	8,236	4,197 (3,089/74%)	1,974 (1,221/62%)	1,856 (369/20%)

出典：令和6年度学校基本調査(卒業後の状況調査)山形県結果

令和6年5月1日現在の置賜地域の大学や専修学校等進学者のうち66%が県外に出ていきます。

○置賜地域については、『令和6年度版置賜地域の概況(令和6年7月)』があります。ご覧ください。

また、山形(県)には、ゆとりのある暮らしと充実した子育て環境があります。「数字で知るやまがた暮らし」から見てみましょう。例えば、次のようなことです。

資料 <https://yamagata-iju.jp/pref/number.pdf>

仕事	高い正規雇用率と共働き率（いずれも全国2位） 短い通勤時間（東京の半分以下）、早い仕事からの帰宅時間 高い有給休暇取得率、25～44歳女性の労働力が高い（全国2位）
子育て・教育	待機児童数5年連続「ゼロ」、安い教育費（東京の半分以下） 育児をしながら働く女性の割合が高い（全国2位） 一人ひとりに丁寧に向き合せ、地域の魅力や伝統に触れられる教育環境
暮らし	高い一住宅の敷地面積と持ち家比率（いずれも全国2位）、安い住宅購入費用
安心・安全	低い犯罪率（全国7位）と高い検挙率（全国1位）

○ それでは、人口減少に対する山形県内の取組を調べてみましょう。

資料4 第4次山形県総合発展計画後期計画の「人口ビジョン」（抜粋）・行政施策の取組例1

● 目指すべき県づくりの方向性

① 人口減少の抑制に向けた施策の展開方向

・若者・女性の志向に合った魅力ある職場・仕事の場の拡大など、若者・女性にとって魅力的な地域づくりの推進

・本県の強みである豊かな自然など、地域資源を活かした関係人口の創出・拡大、移住・定住の推進
・市町村や政府による少子化対策と連動した結婚・妊娠・出産・子育ての切れ目のない総合的な支援

② 人口減少への対応に向けた施策の展開方向

・産業人材育成の取組みの強化や女性や高齢者等の就労の促進など、多様な人材の活躍の促進
・新たな担い手として期待できる外国人材の受入拡大など、地域社会・産業経済の国際化の推進
・人口減少下においても便利な暮らしの実現に向けたデジタルの徹底活用
・医療・介護サービスの確保、日常の暮らしを支えるサービスの充実など、超高齢社会への対応
・市町村と連携した地域活動の担い手となる人材の育成など、地域コミュニティの維持・活性化

出典：山形県人口ビジョン（令和7年度改訂版）概要「II人口の将来展望」から

資料5 置賜圏域の将来像「置賜定住自立圏共生ビジョン」（抜粋）・行政施策の取組例2

今後も、地域の活性化を図り持続的に発展していくためには、単独自治体での事業展開には限界があることから、広域で連携し、効果的、効率的に行政運営を行うことが必要です。また、自治体間の連携に加え、圏域内の関係団体、事業者、住民等との協働を推進することで、さらなる相乗効果が期待されます。(略)置賜圏域のかけがえのない財産を次世代に引き継ぎ、圏域全体が未来に向けてさらに発展するよう、医療や福祉、子育て・教育の充実を図り、置賜の持続的発展を支えとともに、中心市である米沢市の特色である学園都市の強みを生かして大学等と連携し、地域経済を活性化させ、人々の交流で賑わう社会基盤を形成することで、魅力あふれる圏域を目指し前進していきます。

出典：置賜定住自立圏第2次共生ビジョン（令和6年3月策定）「圏域の将来像」から

資料6 若者定着・若者回帰に向けた県内の諸取組

【事例1】 山形県と大学等との UI ターン就職促進協定 31大学等と協定を結ぶ

山形県では、山形県内の企業情報等の提供、大学内での就職ガイダンスの開催等について、大学等と連携して取り組むことにより、Uターン・Iターン就職の一層の促進をはかり、県内企業の人材を確保することを目的として実施している。

<協定締結大学 令和6年9月13日現在> 東海大学、神奈川大学、専修大学、大東文化大学、日本大学、明治大学、国士舘大学、駒澤大学、東洋大学、文教大学、立教大学、帝京大学、帝京大学短期大学、明治学院大学、立正大学、拓殖大学、立命館大学、法政大学、千葉商科大学、神奈川工科大学、関東学院大学、東京工科大学、日本工学院専門学校、日本工学院八王子専門学校、日本工学院北海道専門学校、東北学院大学、東北工業大学、東北福祉大学、東京農業大学、関西大学、城西国際大学

出典：山形県雇用・産業人材育成課

【事例2】 やまがた就職促進奨学金返還支援事業の実施

大学等に在学中の方を対象として、県と市町村が連携して奨学金の返還の一部を支援する事業。米沢有為会、長井教育会、飯豊町も市町村枠で実施。平成27年度から始まり今年度も継続。要件や手続き等については、山形県の「やまがた就職促進奨学金返還支援事業」をご覧ください。

出典：山形県産業創造振興課

【事例3】 高校生就職希望者や就職者に対する地元への人材確保・定着の諸取組

置賜地区雇用対策協議会（行政機関【米沢市・南陽市・高畠町・川西町】や米沢商工会議所、ハローワーク等が連携し、若者の雇用安定を目指す団体）が、高等学校と企業との懇談会や企業説明会（高校2年生の就職希望者に向けて企業動画を制作）、新規学卒者ビジネスマナー講習会、UIターン就職希望オンラインセミナーなどの諸事業を実施している。求人・求職者の両面からサポートし、雇用の確保と定着、就職支援に取り組んでいる。

また、西置賜地区雇用対策協議会では、企業と繋がる就職サーチアプリから企業の最新募集情報が閲覧できるようになっている。

【事例4】 各高等学校における多様な取組

各高等学校においては課題研究や探究学習における地域学習の展開や、職場見学・体験、インターンシップの実施などを通して、郷土愛を育むとともに、社会的自立に向けた勤労観・職業観の育成を目指した多様な特色ある取組が行われている。

【事例5】 働く人の様子・思いなどを SNS で発信

米沢商工会議所が、若者の地元就職や、U・Iターンの促進を目的に、米沢で働く魅力を広く発信する「よねざわのわわわ」[URL:米沢商工会議所(jinzaikakuho-yamagata.info)] プロジェクトを企画・実施。高校生・大学生・U・Iターン希望者等に対し、事業所情報や採用情報をインスタグラムや動画により発信している。

<米沢有為会からの一年早めの情報>・奨学金と学生寮の募集案内

米沢有為会では、皆さんが再来年大学等へ進学した後の学生生活を応援するために

- ①3つのタイプの奨学金（貸与型：女子向け住居費補助奨学金2万円と一般貸与奨学金4万円、減免型：地元若者定着奨学金4万円条件を満たせば2万円減免、いずれも無利子）と
- ②仙台に男子学生寮（平日朝夕2食付き、個室、月6.5万円程度）を用意しています。

今から情報をゲットしてみてください。

詳細は米沢有為会 HP で（QRコードからどうぞ!）



二〇二五年度置賜地区高校生

「地域と私たちの未来を考える」

第八回小論文コンテスト

優秀小論文集

発行日 二〇二五年十月二十五日

発行者 公益社団法人米沢有為会

会長 五雲 寺 卓

〒二八二〇〇四 東京都調布市入間町一―三六

東京興譲館内

電話・FAX 〇三―三三三〇九―三三三〇二

ホームページ: <http://www.yonezawa-yuika.org/>